

誘起場実在論から意識文明への道

田之頭昭徳(宇宙航空研究開発機構)

物質文明は「脳の世紀」においても‘テクニカル’に自走暴走する危機的状況にある。‘脱テクニカル’とは、化学物質・ウイルスなど全自走技術産物の内的相互作用による行く末の逆問題解を得るなど自然の**機能的しくみ・実在性**を知ることであり、それを可能にする人間の**心的文明機能**も意味する。当に今、脳科学技術の展開において真に持続可能な文明条件に踏み込むためには、予知不可能性に対処できる危機管理システムの実現が是非とも必要である。

「誘起場実在論と機能的実在感」

人類は未だ、「物理世界の機能的自然観」を手にしていない。‘物が力で動く’という所与の自然観の歴史が精神(心(意識))現象を区別分断したことにより、特に中世以来の「力」の未分化概念が自然認識における人間の心的実在感を危うくしている。

「誘起場」は、物理学における電磁場が物理的真空場を介して自律誘起する‘自己双対的’実在概念を物質粒子である Dirac 自由電子のスピンの記述描像に認識拡張した基盤をもつ。即ち、場の量子論において「場の一元論」として記述される「力の場」と「物質場」との対比で、電子スピンは‘自己エネルギーが正と負に反転振動する誘起場’として認識され、その実在様相は「自己時間反転的、自己排他的、自己相補性的」と捉えられる。

「誘起場実在論」は、固有な‘自己相補的対基底誘起場’が(電子スピンによる磁気モーメント相当の)ベクトルポテンシャル場を誘起する「自律誘起性」を自然階層における**機能単位**として捉え、脳ニューロンの興奮性と抑制性との正反相補対結合振動回路など、その複合的自己組織化階層性を求めるものである。

これは「力」の未分化概念を「**誘起場機能**」という分化概念に導き、「物質～生命・意識」への機能分化素過程概念により**機能的実在感**を与え、機能分化の逆問題へも通じる道を拓くと期待される。

‘精神(心(意識))文明’

「私の生と死についての絶対的希求感」の本質において、万人の「意識自覚的実感度」の増強こそが生きる人間の心的文明機能に結びつく源泉であり、社会の明日はこの意識自覚する心に依存するのである。今、脳の世紀技術に呑み込まれない文明転回へ向け、「**実在論と実在感**」を論じる文理融合型新科学と、それを母体とする「**意識文明**」の具現が**意識される**必要がある。このメタ的過程は「**誘起場機能**」の階層性((意識)心)精神に求められる。*